

はじめに

江戸時代の後半、日本全国の人口は二千万から三千万人だった。一八世紀にヨーロッパからの移住が盛んになる前のアメリカ大陸には三万人の先住民が住んでいたそうだ。

そのアメリカの人口は二百年間に三億人を超えるまで増えた。国土の四〇パーセントにあたるミシシッピー流域には人口の四分の一の八千万人が住んでいる。

広大な土地で小麦やトウモロコシ、綿花を生産しヨーロッパの産業革命を支えた。ミシシッピー上流域のフォードの組み立て工場ではライン生産で自動車が安く大量に生産された。鉄鋼、アルミが大量に生産されたのもミシシッピー流域である。ミシシッピーで発電し、ミシシッピーを航路として産業が発達した。世界一位のGDPが育まれた背景である。

ミシシッピーでは度重なる大洪水を経験するたびに堤防が築かれ、水路が建設され、蛇行している部分は直線化された。その結果、流れは五百キロ短くなったが、ミズーリの源流も入れると全長六、二七五キロで世界第四位、流域面積は二九八万平方キロで同じく四位である。

水位の変動はヒトにとっては災害になりかねないが、川の生物にとって季節変動は遺伝子にしっかり書き込まれた種の生存を左右する大イベントである。

大河ミシシッピーのヘラチヨウザメは体長二メートルにもなる。顔のスプーン状の突起からスプーンビルと呼ばれ、いつか出会いたいと思っていた。

一九九八年六月、増水したイリノイ川で子供たちがヘラチヨウザメを獲っていた。体長六〇センチから八〇セ

ンチの大きさである。漁期は一月だけ。まさか実物を見ることができるとは思っていなかったので興奮のしっぱなし。ヘラチヨウザメはプランクトンを濾過して食べるので釣餌は使わずひっかけで釣る。

増水のと周辺の樹々は真っ黒で黒いものがうごめいている。近づいて見ると大型のカゲロウ、ヘクサジニア（モンカゲロウ科）の羽化成虫だった。ニュージラランドでも年一回羽化するカゲロウに出会ったが、ミシシッピーのこの様は異様であった。また、白い綿状の塊も飛来している。こちらはポプラ（コットンウッド）の種子で「六月の雪」と呼ばれている。

ヘラチヨウザメは水位の季節変動が引き金になって下流から上流へ、流心から岸よりへと移動する。ヘクサジニアも春季の増水が刺激で大発生する。河畔のポプラも流量が増減することで種子が拡散し発芽が促される。水位の季節変動が生物を産気づかせている。

ミシシッピーは世界の河川の中で淡水産二枚貝の種類が一番多く、かつ、生産量も多かった。とろとろと流れるミシシッピーは二枚貝の生息に適していた。

それがヨーロッパから移住した新生アメリカ人によって次々に捕獲された。プラスチックが発明されるまで二枚貝の貝殻はバリやミラノのファッション界で紳士淑女を楽しませる重要な産物だったからだ。その結果、ミシシッピーの二枚貝は七〇年間ですっかり見られなくなった。さらには貝類が減少したと同時に貝類を媒介とする魚類も激減した。

やっと二〇世紀末になって二枚貝をなんとか甦らせようといろいろな試みが始まった。日頃日本の淀川でのイタセンバラの再生に向けてのご苦労に心を痛めておりさすがに身につまされた。オハイオ川の支川のカンバーランド川の畔ではテネシー溪谷開発公社（TVA）の蒸気発電所の片隅にある実験室で絶滅危惧種の二枚貝の養殖が行われ、これまで一三種の絶滅危惧種を含むほぼ八万個体が自然分布域に放流されたそうだ。とにかく自然保護の規模もとてつもなくでっかい国だ。

戦後のアメリカでは生態系の頂点にあるハクトウワシの体内にDDTなどの農薬が濃縮され、それが原因で卵

の殻が薄くなり、親鳥の体重で殻が壊れて胎児が死に、全米でわずか数百羽まで激減していた。一九六二年のレイチェル・カーソンの訴えがきっかけとなって、DDTなどの生物の体内に残留する農薬の使用が禁止になった。個体数は徐々に回復し、一九九五年には絶滅危惧のリストから外されるまでになった。

毎年一二月から二月には北方からミシシッピの上流から中流域に渡りのハクトウワシが飛来し閘門堰の周辺の河畔林で巣作りし、春まで滞在する。閘門堰の周囲は下流から上ってくる魚を捕るのに好都合だからだ。二四号閘門堰がある人口五百人足らずのクラークスヴィル（ミズーリ州）では毎冬カメラを掲げたハクトウワシファングで大賑わいである。

同様に個体数が激減していたハイイロオカミやアメリカバイソンも、広大で人の入り込まないミシシッピ流域だから復活の努力がなんとか報われている。生態系を大きな視野でとらえることのできるアメリカの自然と行動力を羨ましく思う。

本書ではミシシッピ流域を四章に分けた。

一章は源流からミズーリと合流するセントルイスとウィスコンシン川、イリノイ川、

二章はミズーリとアイエローストーン川やプラット川などの支川、

三章はオハイオ川とテネシー川やカンバーランド川などの支川、

四章はセントルイスより下流から河口までとアーカンソー川とレッド川、

である。各章は四部構成で章扉に各部の範囲を示した。

また、「まとめにかえて」には本書で取り上げたトピックのうちいくつかを時代ごとにまとめた。参考にしていただけたら幸いです。